

日本とベトナムの家庭科教育の比較研究 —— 義務教育を中心として ——

レー・ガン・ハー

はじめに

現在、発展途上国としてのベトナムはますます変化し、多くの分野でチャレンジできる新しい時代に進んでいる。このような背景の下、子どもたち一国の将来の力を育てる学校教育が何よりも期待されている。人間に技能だけではなく多くのことを求める社会の中で、子どもたちに一生懸命勉強させることだけでは十分ではなく、どうやって自分の問題を解決し、他の人と共生し、また自分のことだけを考えず他人に対しても思いやる心を持つという「生きる力」を訓練することも大切になってきている。

これまでのベトナムの教育では技能・知識が重視され、子どもたちが育ってきた。しかし、これからは技能・知識とともに、生活課題解決力、学校で学んだことを実生活に活かす行動力、他人との協力力が求められることになる。すなわち、技能・知識のみならず、生徒たちの意欲、態度を高めさせることが必要となっているのである。

現在、ベトナムの子供たちの自立力が弱くなっていることが指摘されている。また、生活の中における自らの衣・食・住の問題を解決せず家族に依存しすぎていることも大きな問題となっている。激しく変化する社会において、生活を自立して営めるようにし、衣・食・住の基本的な技能、知識、価値を効果的に身につけることができる能力の教育が現在ベトナムの家庭科教育の抱えている悩みである。

このため、昭和22年から始まり、68年の歴史を持っている日本の家庭科教育とベトナムの家庭科教育を比較し、日本の家庭科教育はどう行われているのか、特徴は何か、さらに、日本の家庭科教育からどういうことが学べるかを調査し、ベトナムの家庭科教育に活かすとともに現在まで残っている問題を解決し、ベトナムの家庭科教育をより充実させることを目的として研究を行う。

本研究では、「義務教育の家庭科」を中心として、先行研究、文部科学省の学習指導要領など家庭科に関する文献を調査し、まとめた。資料としては以下のものを用いた。

1. グエン・ミン・ドゥオン他 『工芸6』 ベトナム教育訓練省出版社 2014
2. 佐藤文子他 『新しい技術・家庭 家庭分野』 東京書籍 2012
3. ドアン・チー他 『技術4・5』 ベトナム教育訓練省出版社 2014
4. 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 家庭編』 東洋館出版社 2015
5. 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 技術・家庭編』 教育図書 2008
6. 渡邊彩子他 『新しい家庭5・6』 東京書籍 2014

これらの資料から、必要なデータを収集し、内容の分析を行った。

1. 現在の日越両国における家庭科教育の実施状況

1.1 小学校における家庭科教育

1.1.1 実施状況

今日のような小学校の科目として「家庭科」が定着するまでには、長い時間を要した。明治5年においては小学校女子の「家庭科」は「手芸」（裁縫と行儀作法）であった。

「家庭科、技術・家庭科の現状と課題、改善の方向性（検討素案）」（文部科学省）によれば、明治24年に「小学校教則大綱」により「裁縫」の教授内容が明確化された。大正8年、理科に含まれていた「家事」が独立し、高等小学校では「家事裁縫」が必修、「家事」が選択科目となり、昭和22年の新教科「家庭」の創設で、民主的な家族関係を根底とした家庭建設者の教育を目指し、5・6年の男女に履修させるようになったと言われている。同文書では、社会の変化や教育課題に対応して、目標と内容、授業時数などが改訂され現在に至っていると述べられている。

変化が多い日本の家庭科教育の歴史とは逆に、ベトナムの家庭科教育の歴史には大きな変化が現れていない。チャン・バン・チャイン著『越南共和国期における教育と教科書』（研究発展雑誌第7・8号、2014）によると、ベトナムの小学校の家庭科分野は1949年から1968年まで「手芸」という科目を含め、教えられた。現在の家庭科分野は「技術」という科目に属し、小学校の4・5年次に行われている。

ここでは、日越両国の小学校における家庭科教育の基本的なことを調査し、表1にまとめた。

表1 日越両国の小学校における家庭科教育の実施状況

	日本	ベトナム
教科名	家庭科	技術（家庭科分野）
教科の目標	衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> • 簡単な家事の道具を使えるようにさせる • 簡単な家事の目標、やり方を理解させる • 丁寧さ、器用さ、忍耐力を養成する • 仕事に対する熱意を養い、自分の製作したものに愛着を持たせる
学習する学年	小学校5・6年	小学校4・5年
授業時間数	小学校5年 60時間単位／学年 小学校6年 55時間単位／学年 (一時間単位:50分)	小学校4年 18時間単位／学年 小学校5年 14時間単位／学年 (一時間単位:45分)

内容		小学校 4 年	小学校 5 年
		第一章 切り、縫い、刺繍の技術 1. 切り、縫い、刺繍の材料、道具 2. 線の通り布を切る 3. なみぬい 4. 布の二つの端をなみぬいでぬい合わせる 5. かがりぬい 6. かがりぬい 2 枚の布周りをぬいで合わせる 7. 本返しぬい 8. 自分で選ぶ製品を切り、ぬい、刺繍する	第一章 サービス技術 1. 2 つ穴ボタン付け 2. 「x」字の刺繍 3. 家庭の調理、食事の道具 4. 調理の準備 5. 御飯を炊く 6. 野菜をゆでる 7. 盛り付け、片付け 8. 調理、食事の道具を洗う 9. 切り、ぬい、刺繍または自分で選ぶ料理の調理

1.1.2 実施状況の比較

先ずは目標から見ると、日本の小学校の家庭科教育は家庭生活を中心として技能だけではなく、心を育てることも目指しているが、ベトナムの場合には、生活するための技能が重視され、子供の仕事に対する熱意を養うことが目標となっている。「心を育てる」というのは目標の「家庭生活を大切にする心情をはぐくむ」という部分で現れている。「小学校学習指導要領 家庭編」によれば、家庭生活を大切にする心情をはぐくむということは、家族生活への関心を高め、衣食住を中心とした生活の営みを大切にしようとする意欲や態度をはぐくむことであると言われている。このことは両国の小学校における家庭科教育の相違点となっている。

また、授業時間数もかなり違う。日本の家庭科教育を施行する時間は合計すると 115 時間で、32 時間しかないベトナムのほぼ 3.5 倍になっている。さらに、総授業時数を調べると、日本の 5・6 年次の総授業時数は 1960 時間であり、そのうち、家庭科の時数が 115 時間で、およそ 6 % を占める。一方、ベトナムでは 4・5 年次の総授業時数が 1260 時間で、「技術」（家庭分野）の時数は 32 時間で、およそ 2.5 % を占めるに過ぎない。以上のことから、日本はベトナムより家庭科教育を重視していることが分かる。

それぞれの学習項目が教科書の中でどのぐらいの割合を占めているのかを表 2 に示す。

表 2 教科書から見た各項目の学習量

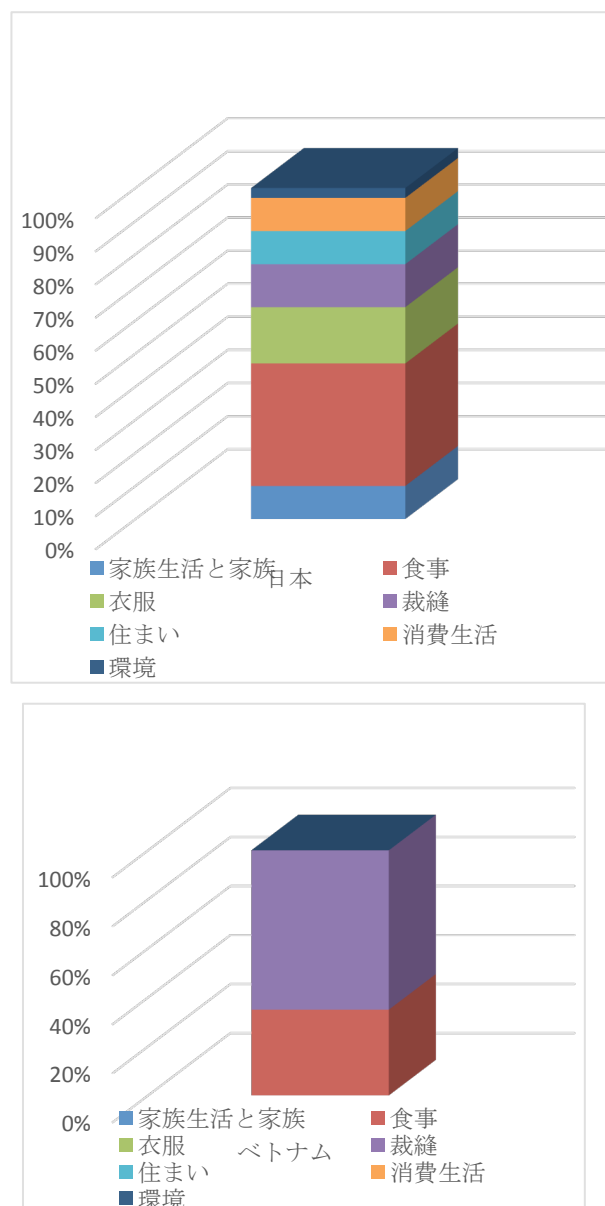


表 2 から分かるように、ベトナムでは食事と裁縫に注目して生徒たちを教育するのに対し、日本は食と裁縫だけではなく、環境、住まい、衣服、消費生活、家族生活と家族にも関心を寄せ、教育内容に加えてあると言える。「新しい家庭 5・6」(東京書籍 pp. 2-3) という教科書に示されているように、基礎技能と実践の内容は半分ずつに分けられ、バランスが良いと思われるが、ベトナムの「技術 4」と「技術 5」という教科書では、基礎技能と実践の割合が 1:3 になっており、実践を重視する傾向にある。先に述べたように、日本ではスキルの練習のみならず心を育てることも大事にしている。このことは「家族生活と家族」と「環境」という項目の、自分の家族だけに関心を持つことのほかに、家族や近隣の人々とののかかわり、環境への関心も高めさせるという目標に現れている。「積極的

に思いやりの心を育てる」のように、道徳と関連づけていることが日本の家庭科教育の特徴と言えるであろう。

以上述べてきた両国の違いの原因として、発展途上国のベトナムでは経済発展が第一優先で、教育が国に貢献でき、働ける人材を育てる願いを持ち、労働能力を訓練する目的で家庭科教育が実施されていることが挙げられる。一方、グローバル化がますます進んでいる日本においては、「確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている」¹ため、その課題を踏まえ、現在の家庭科教育を形成しているのである。

1.2 中学校における家庭科教育

1.2.1 実施状況

日本の中学校における家庭科教育は、明治19年から「裁縫」「礼節」「家政」（養生、住宅、什器、飲食、割烹、衣服、洗濯、理髪、出納、備役、応対、育児、看病）という家庭分野が女子教育として教えられ始めたという。大正10年までは、戦時下の教育として、女子の「家庭科」が重視された。一番大きく変わったのは昭和33年の改訂（昭和37年実施）で、教科名が「技術・家庭科」に改められ、内容が男子用（技術）と女子用（家庭）の構成になったことである。平成元年の改訂（平成5年～13年実施）では、男女共修になり、平成10年の改訂（平成14年実施）では、構成が技術分野と家庭分野になっている。

チャン・バン・チャイン著「越南共和国期における教育と教科書」（研究発展雑誌第7・8号、2014）によれば、ベトナムにおいては、1945年から1949年までの間、女子用の「家事」、「育児」という科目が実施されたと述べられている。1949年から1958年までは「裁縫」が加えられた。また、1958年から1959年までは、男子用の「手芸」と女子用の「家庭・育児」がはっきり分かれることになった。1971年から1972年にかけて、男子用の「工・技・芸」と女子用の「家庭科」が必修科目として教えられ始めた。現在までに、教育改革を何度も経て、家庭分野と技術分野は「工芸」という科目に統一され、男女共修になった。

日越両国の中学校における家庭科教育の基本的なことを表3にまとめた。

表3 日越両国の中学校における家庭科教育の実施状況

	日本	ベトナム
教科名	家庭科（家庭分野）	工芸（家庭分野）
教科の	平成20年9月 中学校指導要領解説 技術・家庭編	ベトナム司法省の教育法

¹ 「小学校学習指導要領解説―家庭編」第一章総説 文部科学省 平成20年8月

目標	衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。	中学校教育は小学校で学習した内容を固め、発展させ、技術についての知識が分かるようにさせなければならない。
学習する学年	中学校各年	中学校 1 年
授業時間数	総計：88 時間単位 (一時間単位:50 分)	総計：70 時間単位 (一時間単位：45 分)
内容	<p>A 家族・家庭と子どもの成長</p> <p>(1) 自分の成長と家族</p> <p>(2) 家庭と家族関係</p> <p>(3) 幼児の生活と家族</p> <p>B 食生活と自立</p> <p>(1) 中学生の食生活と栄養</p> <p>(2) 日常食の献立と食品の選び方</p> <p>(3) 日常食の調理と地域の食文化</p> <p>C 衣生活・住生活と自立</p> <p>(1) 衣服の選択と手入</p> <p>(2) 住居の機能と住まい方</p> <p>(3) 衣生活、住生活などの生活の工夫</p> <p>D 身近な消費生活と環境</p> <p>(1) 家庭生活と消費</p> <p>(2) 家庭生活と環境</p>	<p>第一章 家庭の衣生活</p> <p>1 衣服用によく使われる布の種類</p> <p>2 衣服の選び方</p> <p>3 実習：服の選択</p> <p>4 衣服の使用、取り扱い方</p> <p>製品を縫う</p> <p>5 実習：基本的な縫い方の練習</p> <p>6 実習：赤ちゃんの手袋の作り方</p> <p>7 実習：枕カバーの作り方</p> <p>第二章 住まいの飾り方</p> <p>8 室内空間の整理</p> <p>9 実習：室内空間の整理</p> <p>10 住まいの整理、整とん</p> <p>11 物での住まいの飾り</p> <p>12 盆栽、花などによる住まいの飾り</p> <p>13 フラワーアレンジメント</p> <p>14 実習：フラワーアレンジメント</p> <p>第三章 家庭の調理</p> <p>15 バランスをとる基礎</p> <p>16 食品衛生</p> <p>17 栄養素を守る調理のし方</p> <p>18 食品の調理のし方</p> <p>熱を使わない料理の作り方</p> <p>19 実習： サラダを作る</p> <p>20 実習： 空芯菜サラダを作る</p> <p>21 食事の計画</p> <p>22 食事の計画の作り方</p> <p>23 実習： 献立を作る</p> <p>24 実習： 野菜の盛り付け</p> <p>第四章 家計</p> <p>25 家族の収入</p>

		2 6 家計
		2 7 実習：家計

1.2.2 実施状況の比較

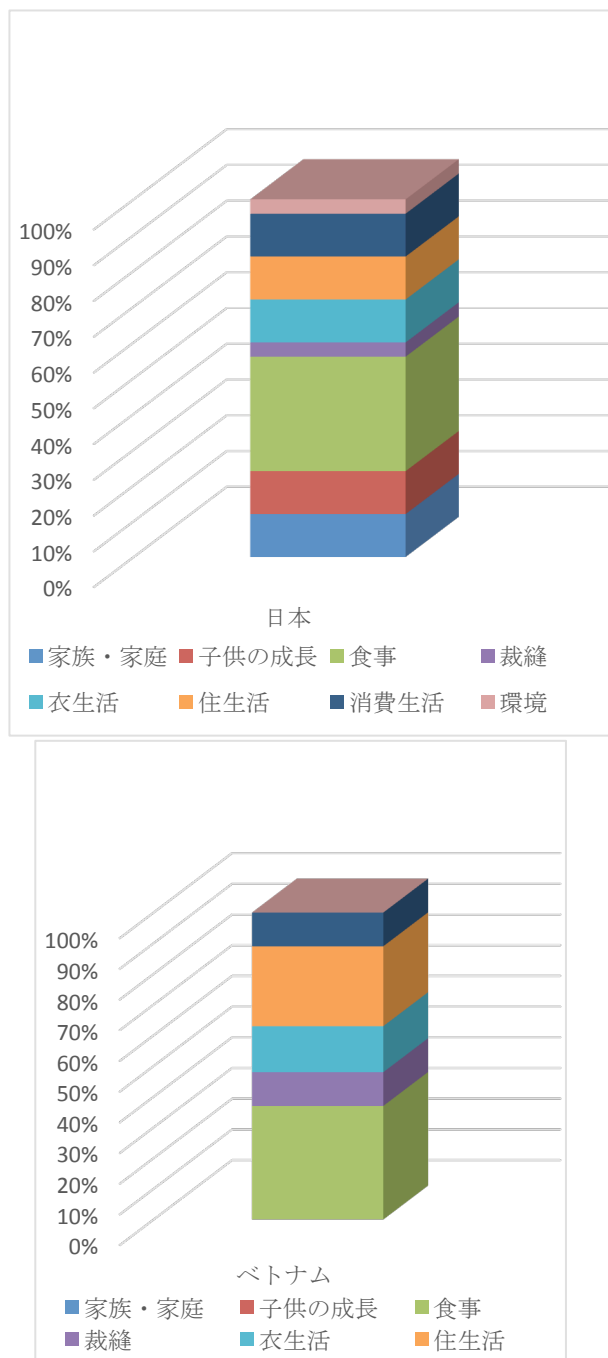
『中学校学習指導要領解説 技術・家庭科』(p.38)に掲載されているように、家庭分野の学習の狙いは「自立」と「問題解決」である。小学校の家庭科は子供が家族の一員として自覚できることを求めるが、中学校になると、自覚の土台からより知識・技能を実践できるように身に付け、自分の家庭生活だけではなく、地域社会を支えることも目標としている。また、同書には、家庭分野の学習は、小学校の家庭科学習を基盤として発展させるものであり、その連携性と系統性を重視しながら指導することが大切だと述べられている。ほぼ同じ意味で、「小学校で学習した内容を固める」ということはベトナム司法省の教育法に書かれており、「工芸」（家庭分野）を含め中学校の各科目はその内容を指導要領として学習されている。つまり、「自立」と「問題解決」を目指す日本の中学校の家庭科教育であっても、小学校からの「心を育てる」方針を離れておらず、ベトナムにおいても小学校の家庭科教育の「仕事に対する熱意」をより高めることを目指しているのである。

学習する学年を見ても、はっきりとした違いがある。日本は中学校各学年で「技術・家庭科」を学ぶが、ベトナムの場合は中学校の1年次だけ学び、中学校の2・3・4年次では技術分野に入る。すなわち、日本のように家庭分野と技術分野を同時に実施する代わりに、ベトナムでは中学校1年次に家庭分野を済ましている。確かに同時に教えるか別々に教えるかはその国の状況、教育システムなど様々な要素から影響を受けるので、一概にどちらの方が効果があるとは言えないが、中学校在籍中に技術と家庭科を同時に教える方がはっきりと教育の連続性を表し、生徒たちに関心を持たせることができるのではないだろうか。

小学校の場合と違い、日越両国の中学校の家庭科分野の時間数には大きな違いがない。しかし、両者の学習する内容はかなり違う。日本では中学校3年間で88時間を学習するが、ベトナムでは中学校一年次に家庭分野の70時間を学習する。日本よりベトナムの方が知識・技能量のプレッシャーが高いと指摘される所以である。

それぞれの学習項目が教科書の中でどのぐらいの割合を占めているのかを表4に示す。

表4 教科書から見た各項目の学習量



内容について言えば、日本では「子供の成長」を新しい内容として加えており、ベトナムも「住生活」と「消費生活」を加えている。先に述べたように、日本の中学校の家庭科は「自立」と「問題解決」を中心として行うが、新しいポイントは全部が家族や地域社会との連携に重きを置き、施行していることである。「子供の成長」と「地域とのかかわり」を教えることは生徒たちに現在の少子化・高齢化社会への意識を高めさせるだろう。それに、栄養、調理などを勉強させるだけではなく、生徒たちに地域の食文化

への関心を持たせることにもなる。これらのことによって、日本の家庭科教育は社会の広い範囲にまで影響を与えることになり、問題解決力を一層高めるだけではなく、広さにおいても深さにおいても発展していくことになる。

ベトナムの中学校の家庭科では、総学習量の約 40%を使い、実習を行うことになっている。それはベトナムの家庭科教育がまだ技能を中心として行われていることを示している。日本との相違点は住生活について教える割合が高いということであり、快適な住まいを整えることのほかに、住まいの美にも関心を寄せ、住まいの飾り方も主要な教授内容となっている。家庭科に美学的な内容を含めることはかなりクリエイティブなことだと言われるが、重要なことであると筆者は考える。実習時間が多いということは実用性を重視しているということであり、ベトナムでは生徒たちに実生活に即したことを学習させ、それを実践させる方針を採っていると言える。

日越両国に共通することは、両者とも小学校の家庭科を土台として中学校の家庭科教育を発展させようとしていることである。教育範囲の拡大や、社会への適応という考え方は両国の中学校における家庭科教育を構成する主要な要素になっている。

2 日越両国の家庭科教育の課題

2.1 日本において

家庭科、技術・家庭科の現状は「改善の方向性（検討素案）」によると、次のような点が課題であると指摘されている。

- 学習した知識や技術などが実生活で十分生かされていない
- 子どもたちが自己と家庭、家庭と社会とのつながりに目を向け、生涯の見通しをもってよりよい生活を追求できる実践力を身に付けること、少子高齢化や家庭の機能が十分に果たされていない状況から、家庭の在り方や家族の人間関係や子育てについての学習が必要
- 食生活の乱れや消費者トラブルの増加などから、食育や消費者教育の充実が課題

内藤道子他著『生活の自立と創造を育む家庭科教育』（家政教育社 2000 年 pp. 44－46）によると、家庭生活を学習の対象とする家庭科、技術・家庭科であるが、学習者である子供たちは、家庭の仕事を経験することが少なく、家庭生活を意識しないまま日常生活を過ごしていることが多いと言う。また、子供たちの生活実態として、生活経験が少なく、人間関係を結ぶ能力が低いため、生活者としての存在感が薄いと言われる。このように学習した知識や技術などが実生活で十分生かされていない原因は、学習と生活との結び付きが弱いということにある。授業を通じて、どうやって教材にある知識や技術などを実生活と結び付け、生徒たちが自分自身の家庭生活で実践できるように考えさせるのかは、家庭科教育の大きな課題とでであると思われる。

少子高齢化社会という背景を持つ現在においては、子どもたちに自己と家庭、家庭と社会とのつながりに目を向けさせるという家庭科教育の目的を達成することは今後ますます難しくなっていくだろう。人生経験がまだ少ない生徒たちに現在暮らしている社会の状況を意識させ、幼児や高齢者への関心を深めさせ、家族だけではなく社会に対する自分の役割を気付かせることが非常に必要となっている。

先進国の日本においては、食生活と消費生活が極めて便利で、選択も数えきれないほど多いと言われ、食育や消費者教育の充実を図ることは難しくなっている。このような社会で、新鮮な食べ物の選び方や栄養など基礎的なことだけを食育で教えることは、十分とは言えず、また、生鮮食品と加工食品、ファーストフードとスローフードについての知識や、食品に入る添加物に関する知識などを身に付けさせ、食生活の乱れが自分自身の家庭の食生活に悪い影響を与えないようにさせることも現在の家庭科教育の課題である。また、近年消費生活も急激に変化してきている。輸入製品の選び方、テレビショッピング、ネットショッピングの安全性などの最近出てきた新しい消費上の問題も教える内容に加えるべきだと思われる。

2.2 ベトナムにおいて

日越両国の中学校における家庭科教育の実施状況から見ると、ベトナムの家庭科教育には次に挙げる3つの大きな課題があることが分かる。

- 現在の男女共修に合わない内容が含まれている
- 住生活が重視されていない
- 家庭分野は技術（小学校）、工芸（中学校）の中の一つの内容にすぎず、家庭科の本質を勉強するより家庭生活を送るための技能の教授に偏っている。従って、生徒たちも知識や技能を習得するところで止まり、実生活への実践力が低いと言える

1975年から現在までベトナムでは同じ系統の教科書が使われ、教育系統も統一されている。家庭科教育も以前の男女別学から男女共修になった。男女共修に合った教科書の内容を作成することは簡単ではないと思われる。先に述べたように、元々の家庭科教育は女子のための教育であり、こういう教育を男子にも合う教育に変えることは時間も、手間も多くなるようである。例えば、小学校の技術（家庭分野）における「刺繍」の内容や中学校の工芸（家庭分野）における「フラワーアレンジメント」という内容は女子には合うが、男子には合わない。

また、日本のように地震が多い国は地震対策の住生活の整理はしっかりしないといけなが、地震があまり起こらないベトナムでは、室内空間を整理する時にそのようなことを気にしなくてもいい。しかし、田舎にあるベトナムの伝統的な住宅には様々な危険が潜在している。伝統的な住宅には井戸や池もあり、生徒たちに用心させないと、事故に遭うかもしれない。

小学校から中学校まで「仕事に対する熱意」を中心として家庭科教育を行っているベトナムでは実際に仕事ができるように多くの技能を生徒たちに身に付けさせている。しかし、知識・技能の量が多いが、実践で生かせる割合はかなり低いと言われる。それは、教育の内容がかなり古いため、今日の絶えず変化している社会においては、高い効果があげられないからだ。社会の要求に合わせて、家庭科の目標を「仕事」から「生きる力」にまで広げ、生徒たちを指導すればよりよい教育になるのではないだろうか。

3 ベトナムの家庭科教育への提言

日本の家庭科教育を参考に、ベトナムの家庭科教育に対して次のような提言を行いたい。

「心を育てる」ということは昔から今まで変わらず「道徳」という科目の目標なので、家庭分野を教える時、「道徳」とのつながりはほとんどない。それはベトナムの家庭科教育の欠点と考えられる。なぜならば、家庭科教育の基本的な目的は「家庭生活をよりよくする」ことであるので、生徒たちに先ず家族を大切にすることを教えると同時に家庭における自分の役割を考えさせ、自分の家庭と地域との関係などを理解させないと、どんなに勉強しても効果が出てこないからだ。そのため、「仕事」を重視するベトナムの家庭科教育も社会に貢献できるための労働力を養成する前に、先ず生徒たちの心を育てるべきではないだろうか。社会に貢献できるまで、自分の家庭生活の質を高められるようにすることが重要である。自分の家庭生活の質を高めるには、家庭生活の問題を解決する力だけではなく、環境を大切にすることや他の人への思いやりも必要になる。技術的なことを教えるだけではなく、心を育てる教育も行えば、より高度な人材を養成できるのではないだろうか。

内容が、対象となる生徒や地域状況に合わない場合は、現状に合わせて柔軟に対応することも必要だと思われる。例を挙げれば、「刺繍」の代わりに、日常生活に即応できる普段の裁縫教育を実施することとか、フラワーアレンジメントを教えるよりも住宅を飾るための物作りなどを指導したりすることである。また、地域の状況を判断し、田舎にある学校なら指導計画に伝統的な住宅のことも入れ、都会にある学校なら都会に特有な狭いアパートのことも住生活の学習項目に加えるべきである。

学習する時に、家族とのつながり、家族の世話、環境への配慮なども質問形式として生徒たちに考えさせれば、少しずつ「心を育む」こともできるだろう。

時代にもう合わない教科書の改革はなかなか難しいが、生徒たちが効果的に家庭科を勉強できるように、教師たちが適切な学習環境を作ること大切であろう。他には、定期的に評価するために生徒たちの意見を求めるアンケート調査も必要だ。そうすれば、教育の課題がはっきり分かるようになり、家庭科教育をより発展させることができるだろう。

おわりに

本稿では、日越両国における家庭科教育に着目し、学習指導要領、先行研究などを調査

しながら、「日越両国の家庭科教育の比較研究」を行った。本研究を通じ、両国の家庭科教育の特徴が分かってきた。両国の家庭科教育がこれまで実践してきたことだけではなく、解決すべき課題も分かってきた。また、日本の家庭科教育から学ぶべきことをまとめ、今後のベトナムの家庭科教育に生かすための方向を一言提案することができた。

一方で、本研究ではまだ取り組めていないこともある。まず、実際の調査データが少なく、資料はほとんどが先行研究から取り出した。時間的な制約のため、アンケート調査を行えなかったが、アンケート調査が実施できるならば、より客観的な研究結果を得ることができると考える。また、本研究では日越両国の家庭科教育の内容を重視してきたが、大要しか説明できなかったのも、内容の詳細まで分析できていない。次の研究では、より詳細なデータを収集し、より教育的な意義のある研究に取り組みたいと思う。

参考文献

1. グエン・ミン・ドゥン他 『工芸 6』 ベトナム教育訓練省出版社 2014
2. 佐藤文子他 『新しい技術・家庭 家庭分野』 東京書籍 2012
3. チャン・バン・チャイン 「越南共和国期における教育と教科書」『研究発展雑誌 第7・8号』 2014
4. ドアン・チー他 『技術 4・5』 ベトナム教育訓練省出版社 2014
5. 内藤道子他 『生活の自立と創造を育む家庭科教育』 家政教育社 2000
6. ベトナム司法省 「ベトナム教育法」 ベトナム司法省ウェブサイト 2005
7. 文部科学省 「家庭科、技術・家庭科の現状と課題、改善の方向性（検討素案）」文部科学省のウェブサイト 2007
8. 文部科学省 「我が国の教育経験について 家庭科教育 我が国の家庭科教育の経験と特徴」文部科学省のウェブサイト 2002
9. 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 家庭編』 東洋館出版社 2015
10. 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 技術・家庭編』 教育図書 2008
11. 渡邊彩子他 『新しい家庭 5・6』 東京書籍 2014